



# 羅針盤

梅林 芳弘

Yoshihiro Umebayashi

東京医科大学八王子医療センター皮膚科 教授,  
Visual Dermatology 編集協力者



## 羽虫のごとく纏わりつくもの

本号の内容は今年の日本皮膚科学会総会で発表した内容を基にしています[その経緯は総論(p.1220-1222)に書きました]。講演の準備をしているとき、古い記憶の澱から剥がれるように一片の疑問が浮かび上がって来ました。それは好発部位とは直接関係のない問題なのにどこか通底しているように感じられ、あたかも迷惑な虫のように纏わりついて私の集中力と時間を奪っていったのです。

それというのは40年近く昔、神経解剖学の講義において、錐体路が延髄下部で交差し、左(右)脳が右(左)半身の運動を支配している(錐体交差)ことを教えられたときのことで、何故左右が入れ替わるような不思議な構造になっているのか、という素朴な疑問が疼き出しそうなタイミングで、解剖学の教授は言ったのです。「何故交差しているのかという説明はいろいろあるが、そういうのは科学ではない」と。まるで蠅叩きでビシヤリ、という感じでした。「そうになっているものは仕方がないのだ」

私が「今」考えなくてはならないのは病的状態(の発症部位)に関する「何故」である、正常構造に関わる「何故」ではない、だから往年の疑問とは直接関係がない、と邪魔な記憶を追い払おうとしました。しかし、ヒトの正常システムは生存に有利なように実にうまくできている、と合目的的に説明され、多くの場合それで納得してしまっているがそれもいけないのか、と疑団が募っていきます。

原因。理由。何故。説明。納得。これらは一体何なのか。どうも根っこはそこにある気がするのです。とはい

え深入りするとヤバそうで、こんな言葉があるのかどうか知りませんが(たぶんない)、「**迷路感**」が濃厚です。こだわると患者対応にも影響しそう(自分の病気の原因は何かとよく訊かれますね。これに対して哲学的回答で煙に巻いていると、信頼関係は迷走するでしょう)。

学生時代の私は、やはりいろいろあるという錐体路が交差している理由を聴いてみたかった。そして、成程、面白い、と膝を打ってみたかったのです。しかし、そういうのは考えると言われて思索することを抑え、そのうち疑問を感じたことを忘れ、今では錐体路という言葉自体疎遠になってしまいました。

いや懐旧に浸っている場合ではなく、とにかく好発部位について考える前に、この五月蠅い虫を除かなくては、そう思い、40年ぶりに錐体交差の存在する理由を考え、結果自分なりの答えを捻り出しました(ここでは書きません)。その後、かつてはなかったインターネットで検索したところ、正にいろいろな理由があげられていることを知りました(私の思い付きに一致するものはなし)。中には牽強付会としか思えない説もあり、確かにこの営為は「科学」とは言えないかもなあと、寧ろそちらの方が合点がいてしまいました。

さて、「好発部位の謎」です。本号の解答にあなたは納得がいくでしょうか。逆に視界が悪くなったのなら、「目からウロコ」ではなく「目からコンタクト(レンズ)」と言われるかも。いや寧ろ簡単に納得しない方がよいかもしれません。歓迎の辞としてはこう言いましょう。ようこそ**ラビリンス**へ。